

定冠詞総称名詞句管見

大 西 泰 斗

0. 導入

現在に至るまで広範な研究が行われている総称名詞句にあって、その中心は裸複数形 (bare plurals) にあり、定冠詞総称 (definite generic) は幾分置き去りにされている感がある。本稿では、定冠詞総称のもつ特殊性とその起源を、裸複数形の比較のもとに論じる。

1.0 定冠詞総称名詞句の特殊性

定冠詞総称は、裸複数形と同様「種 (kind)」全体をあらわす用例をもつ。Carlson (1980) であげられた一連の例文を示しておこう。

- (1) a. The owl has two eyes in the front of its skull.
b. Owls have two eyes in the front of their skull.

(1a-b) の the owl, owls は、現実に存在するフクロウを示してはいない。どちらも「フクロウは頭蓋骨前方に目をもつ」と、フクロウという種族のもつ性質についての記述 (総称読み) である。またどちらの表現も種族をその意味範囲にとる述語と共存することができる。

- (2) a. The owl is that kind of bird.
b. Owls are that kind of bird.
(3) a. The owl is common/ widespread/ fast disappearing/ often intelligent.
b. Owls are common/ widespread/ fast disappearing/ often intelligent.

しかし Carlson によると、2つの形式は完全に同じ意味をもつとは言い難い。代表的なちがいに次のものがある。

(i) 存在読みの制限

- (4) a. Owls are in that cage.
 b. *The owl is in that cage.
- (5) a. Bill threw apples at the embassy.
 b. *Bill threw the apple at the embassy.

裸複数形には種族を示す用例がある一方、その種族の個々の成員が言及される存在読みがある。(4a)の主語 owls は、「フクロウ」という種族全体ではなく、個々の具体的「フクロウ」の存在を意味している。

- (6) $\exists x[\text{owl}(x) \ \& \ \text{in that cage}(x)]$

一方 (4, 5b) の定冠詞総称には存在読みが不可能である。

(ii) 「重大なできごと」

- (7) a. The horse came to America with Columbus.
 b. Explorers first saw the buffalo in 1517.

しかし、Carlson によると存在読みがすべて不可能になるわけではない。(7a) でコロンブスによって持ち込まれた the horse, (7b) における the buffalo は、実際には種族全般ではなく——具体的には——ほんの数頭の馬だからである。しかしこの場合にも、裸複数形とは本質的に意味内容が異なる。

- (8) Horses came to America with Columbus.

この文は、2通りに曖昧だと Carlson は言う。「コロンブスとアメリカに来た馬が数頭いた」という標準的な存在読みと、「馬という種族が(最初に)アメリカに来たのはコロンブスと共に、である」という、種族全体にとって重大な意味をもつ事態が起こったという読みである。もちろん種族全体にとって重大であろうが——そうでなかろうが——実際にアメリカにやって来たのは数頭の馬であるから、これもある種の存在読みと言うこともできるだろ

う。だが (7a) の定冠詞総称が許容される「存在読み」は、この（後者の）意味合いに限定される。(7a) と次の、何の変哲もない存在読みを要求する述語をもつ文を比べてみよう。

(9) *The horse arrived on my doorstep yesterday.

この文は一見して非常に奇妙な文である。そしてそれはこの文が何の変哲もないありふれた事態だからである。

またこれに関係して、定冠詞総称がある種の「畏怖 (awe)」「重大なできごと」などの際だった表現効果を与えていることも指摘されている。

(10) a. The zoologists are trying to find blue-nosed ground squirrels.

b. The zoologists are trying to find the blue-nosed ground squirrel.

(10b) では「滅多に見られない」「絶滅したと考えられてきた」などが印象づけられるのにたいし、(10a) の裸複数形にはそうした特段の印象は感じられない。ちなみにありふれた動物——たとえば牛 (cow) ——を使うと、(10b) は遙かに容認しがたい文となる。

(11) The zoologists are trying to find the cow.

これら裸複数形と比較した定冠詞総称の特殊性は、何を起源とするものであろうか。また、その特殊性は総称表現の意味論分析をどのような方向に導くのであろうか。

2.0 裸複数形の示す「存在」読み

2.1. Carlson (1980)

定冠詞総称が裸複数形にたいして際立ってもつ特徴は、存在読みが一般に制限される、ということである。その起源、理由を考察するには、それを可能にする裸複数形の解釈メカニズムをあきらかにする必要があるだろう。

(12) Athletes ate a light breakfast.

この文は、athletes において2通りの解釈が可能である。すなわち「運動選手全般」という総称読みと「そういった運動選手が(数人)いた」という存在読みの解釈である。それぞれ

れ back in those days あるいは this morning などを補えば、その解釈のちがいがより鮮明になるであろう。Carlson (1980) で提案された、個々の読みのちがいが生ずるメカニズムは次の2つの主張を前提とする。

【主張1】

裸複数形は、種につけられた「名前 (name)」であり Jim や Bill など通例の個体と同様の意味内容をもつ。

【主張2】

述語には、個体が特徴的 (characteristically) あるいは恒久的 (permanently) にもつ性質に言及したもの (個体レベル述語: individual-level predicate) と、ある個体が一時的に——あるできごと (event) 内において——もつ性質 (stage) に言及したもの (できごとレベル述語 stage-level predicate) が存在する。

裸複数形の例に進む前に、この2つの主張がどういった解釈のちがいとつながるのか準備運動をしておこう。

(13) Bill ate a light breakfast.

この文も (1) に似た曖昧性をもっている。「(当時) ビルは軽い朝食をとっていた」、という習慣的解釈と、「(ある朝) ビルは軽い朝食をとった」というできごとの解釈である。Carlson の分析では、習慣読みは ate a light breakfast が、特徴的・恒久的の性質を示す個体レベル述語であることになる。またできごと読みは、ate a light breakfast が、あるできごとと内のビルの一時的性質 (stage) を示す場合に生じていることになる。

さて、(12) には概略次の2種類の論理形式が与えられる (説明の簡便化のため時制オペレータは省略する)。

(14) a. *eat-a-light-breakfast* " (a)

b. $\exists y [R(y, a) \ \& \ \textit{eat-a-light-breakfast}'(y)]$

述語につけられた (') (") は、それぞれその述語ができごとレベル、個体レベルであることを示す

(14a) が総称読み、(14b) が存在読みである。総称読みは *eat-with-a-knife* を個体レベル述語と解釈することによって起こる。「軽く朝食をとるという特徴的の性質をもったものの中

に、運動選手が含まれる」, それが (14a) の意味するところである。論理形式中 *athletes* が内部構造への言及なく単に *a* と表示されていることに注意されたい。これは *athletes* という種族が Bill や Lucy など, 他の名前と同様に扱われていることを意味する。また, (14b) において述語はできごとレベルにあり, 関数 $R(\text{realization})$ は個体とその一時的な性質 (stage) を関連づけている ($R(a,b)=\text{def. } a \text{ is a stage of } b$)。したがって (14b) は「種族 *athletes* (に属する個体) は軽い朝食をとるという一時的性質を有した」と, 存在読みに対応していることになる。

2つの読みを派生させるこのメカニズムは, 直観的には「名詞句の解釈が述部の (のあらわす「時」の) 解釈に依存する」ということであり, 【主張2】にその中心を依存するが, もっとも大きな批判が集めてきたのはまさにその点である。

この分析では, 2つの読みを生み出すあらゆる述語は別々の意味をもつ同音異義語 (homonym) として扱われざるをえない (*run'*, *run''* など)。また, 存在読みの論理形式に, 統語的な起源をもたない関数 R が導入されるのも, 統語構造と意味構造の対応を考えれば不自然である。

2.2. 時間を意味しない *when*

Carlson の分析の基礎にある「名詞句の解釈が述部の (示す「時」の) 解釈に依存する」——これは「名詞句の解釈が時に依存する」ということであるが——という直観は, Dahl (1975) の総称時制 (generic tense) をあげるまでもなく, 過去の様々な分析の中で脈々と受け継がれてきた直観であり, Carlson (1979), Farkas & Sugioka (1983), Schubert & Pelletier (1987) による「時間を意味しない *when* (atemporal *when*)」の分析もこの系譜に位置する。

基本的に時をあらわす *when* 節が, *if* 節と交換可能な例をもつことは広く知られている。

(15) I get nervous when (if) I meet people for the first time.

次の総称文に使われている *when* も同種のものであり, (3)のようにいずれも *if* と交換可能である

- (16) a. Lizards are pleased when they are in the sun.
 b. Bears are intelligent when they have blue eyes.
 c. Canaries are popular when they are in the sun.

(17) Lizards are pleased if they are in the sun.

Carlson (1979) の分析はやはり「名詞句の解釈が時に依存する」に沿ったものだ。この時を意味しない when 節を、統語論的には副詞節であるが意味論的には制限関係詞節であると主張するのである。(16a) が (18) に書き換え可能であるからだ。

(18) Lizards that are in the sun are pleased.

時が名詞句の解釈を制限するという直観が、制限関係詞節へのパラフレーズを通じて出口を与えられているのである。だが、この解法にはいくつかの難点がある。統語的構造と意味構造の間の非常に大きな乖離が好ましくないことはすぐに見て取れよう。さらに致命的なのは、時をあらわさない when 節の例には、適切な制限関係詞節へのパラフレーズを許容しないものが数多く見受けられることである。

(19) Bears have thick fur when the climate is cold.

また、ここでも先の同音異義語問題があることに注意されたい。この分析では、when が制限関係詞節に翻訳される when1 と、通常の時をあらわす when2 の 2 つに分裂してしまうのである。

Farkas & Sugioka (1983) の分析は、Carlson と Lewis (1975) を折衷したものとみることができよう。彼らによると (16b) の論理表示は以下のようなになる。

(20) a. Bears are intelligent when they have blue eyes.

b. $G(\text{have-blue-eyes}(x_0) \supset \text{intelligent}(x_0))$

$[x_0: \lambda z_0 (R(z_0, b_k))]$

行頭の G (generally) は Lewis (1975) で提案された非選択的限量詞 (unselective quantifier) であり、式中の任意の変数 (この場合 x_0) を束縛できる。したがって (20b) は「一般に x が青い目をしているなら x は賢い」と、ターゲットの読みに沿ったものとなる。ちなみに変数 x_0 は $\lambda z_0 (R(z_0, b_k))$ をその変域として取る。すなわち「熊という種族 (b_k) を具現化する (R) 個体 (z_0)」ということである。

この分析も表面上のちがいはあれ、中核となるアイデアが Carlson 同様「名詞句の解釈が時に依存する」であることが容易にみてとれよう。本来時をあらわす when が含意関係

(㉔) としてとらえられ、実効上 bears 指し示す領域を狭めるように機能するからである。もちろん先に示した Carlson への批判は、この分析にも当てはまる。含意関係として解釈される when は通常の時をあらわす when と、依然として、まったく乖離しているからである。

3. Onishi (1990)

さまざまな分析の直観的原点「名詞句の解釈が時に依存する」はおそらく正しい。「できごと」に限定→存在読み」「特徴的・恒久的など限定されない→総称読み」という対応関係は動かぬものであろうし、また when によって時を限定することによって、名詞句 (bears など) が指示するものもやはり限定を加えられるからだ。また、次のペアにおける読みのちがいも、この直観を後押しすることになるだろう。文を進行形にし、強制的にできごと」に限定させると、種族読みが不可能になっている。

- (21) a. Beavers build dams. (種族読み)
 b. Beavers are building dams. (存在読み)

「有界 (boundedness)」と「非有界 (unboundedness)」という2つの概念を用いた Declerck (1986) の観察はこの、時による限定をさらに押し進めた形になっている。彼は、名詞句が総称的に解釈されるには如何なる「限定表現」も存在してはならない、という。(21b) の進行形はこの文のあらわす状況を1つの (あるいは数個の) できごと」に限定するため、総称読みはブロックされることになる。また次のような副詞相当語句や名詞句も、限定表現とカウントされる。

- (22) a. That day Nelphi's dog chased cars.
 b. Bill killed all the vermin within five minutes.
 (下線は筆者追加)

(22a) の that day はもちろん、(22b) の all the vermin はある決まった分量の vermin を殺したに導くため、文全体をあるできごと」に限定する。次の文において総称読みが可能であることと対照的である。

- (23) This insecticide kills vermin within five minutes.
 (下線は筆者追加)

彼が提出した有界・非有界という概念は、決定打というよりはむしろ良質の観察という評価に留まるだろう。というのはこの「限定・非限定」は、ある確固とした条件付けで分類できるわけではない、つまりは未定義概念であるからだ。彼の例と等価な、時限定の副詞相当語句と定量を意味する名詞句の例をあげてみよう。

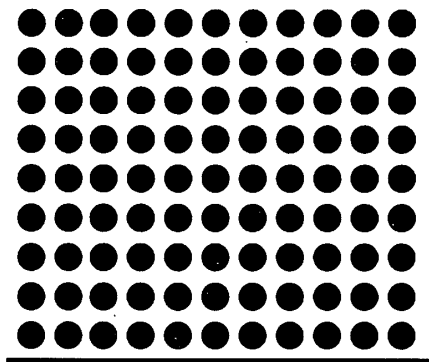
(24) a. When Nelphi's dog was young, he chased cars.

b. Sam beats the girl.

(24a-b) には、どちらにも習慣読み——総称読みを生み出す——が可能なことがわかるだろう。文の外形的条件は、できごと／特徴・恒久という、文のあらわす状況の種別を支配するのではなく、そのどちらかを強弱のちがいはあれ「示唆」するに留まる、いわば語用論の範疇に属する事柄なのである。

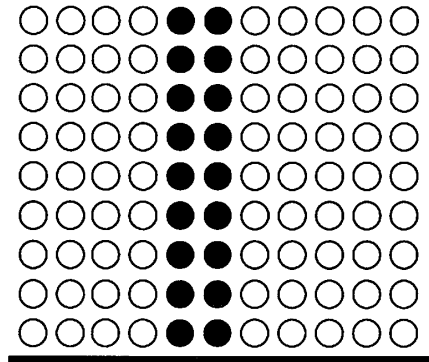
Onishi (1990) は、これまで紹介した分析と同じ系譜に属する。すなわち「名詞句の解釈を時に依存」させる試みである。そこでは (12) の総称読み・存在読みそれぞれ次のような解釈を与えている。

(12) Athletes ate a light breakfast.



(a) ate a light breakfast

time



(b) ate a light breakfast

time

総称読みは ate a light breakfast が無限定の時を示すときに与えられる。この分析では、世界に存在する個体集合は時によって刻々と変化するものとして定義されており、時が無限定であるということは、過去・現在・未来に存在する、athlete に属する個体をピックアップすることとなる。また存在読みは、述語 ate a light breakfast がそのできごとに関わる「時点」に存在する athlete をピックアップした結果ということになる。実際の分析では時

制オペレーターと共同しながら、状況を時間軸上に「配置する」LOCATOR (INT, PT) を想定し、また意味論モデルの中で、時とその時点に存在する個体を関連づけるパラメータ関数、時間に応じて個体ドメインを変更する可変ドメインを提案している。(システムの詳細、また時をあらわさない when 節等の分析については Onishi (1990) を参照されたい)。

3. 定冠詞総称名詞句

3.1 定冠詞 the の意味するもの

冒頭の疑問に戻ろう。定冠詞総称と裸複数形間の相違が問題であった。これまでの分析によって、裸複数形の一定の性質はある程度明らかになったであろうから、次に定冠詞 the の一般的性質を考えてみよう。

(25) John: I met the man yesterday.

Mary: Oh, I see.

ジョンは the man によってケンという人物を指し示していると仮定しよう。この会話が成功裏になされるためには、まず——当たり前のことであるが——次が成り立たねばならない。

John knows that the referent of *the man* is Ken.

また、the man という表現が正常に働くためには、ジョンがメアリが同じことを知っていることを期待しなくてはならない。メアリにとって the man が何を意味するかわかる、という前提をおかねばジョンは the を使うことができないからだ。したがって、

John knows that Mary knows that the referent of *the man* is Ken.

Clark & Marshall (1981) は、共有知識問題 (common knowledge) に関する研究の中で、the が有効に使われることを保証するためには、この know による埋め込みが無限に連鎖 (KjA, KjKmA, KjKmKjA, ……) しなくてはならないことを例証したが、ここではそこまでの必要はあるまい。ただ the が適切に用いられるためには、その指示物が、その表現の聞き手すべてにとって明らかでなくてはならない旨を確認すれば十分である。談話の参加者にとって the の指示物は共有知識内になければならない、簡単に言えば

【定冠詞 the 定義】

theは談話状況の成員すべてにその指示物が『見えて (visible)』いなくてはならない

定冠詞表現は一般に、その指示物が談話の中で唯一的に決まりさえすれば、固有名 (name) と同様に機能する。(2) において the man と Ken を入れ替えてもその真理条件は変わらないだろう。そしてまた、固有名 (Ken, Jim……) は、それぞれが有する属性の束 (bundle of properties) と考えることができる。(*1)

定冠詞 the による総称名詞句も、これまで述べられた the の一般性質と離れて論じることができない。まったく別種の意味を総称用法にたいして認めると、以前指摘した同音異義語の問題に立ち至るからだ。ここではもっとも穏当な仮定、すなわち「定冠詞総称で用いられる the も、一般的な the と変わるところがない」というという仮定を採用することとしよう。

そうすると問題は次のようになる。定冠詞総称 にはいかなる指示物——すべての成員に「見える」指示物——を与えることができるだろうか。

3.2 一般に認知された属性：既成概念

定冠詞総称について——先に仮定した通り——【定冠詞 the 定義】を当てはめようとする、そこに非常に強い制限がかかることがわかるだろう。(25) において、the man はおそらく、ジョンとメアリの談話における先行文脈によって、あるいは二人の置かれた状況において、その指示内容が決定されているはずだ。しかし総称用法はそうはいかない。定冠詞総称はそういった先行文脈が存在しなくても——存在しないのが通例である——成り立つからだ。談話においてテレビや車がそれまで一言も言及されていなくても、その場に車やテレビがなくとも次は容認される。

(26) a. *The television* is a marvelous invention.

b. *The car* is the most convenient means of transport.

このような場 the の定義における、「談話状況の」は意味をなさない。あるいは「空に」適応されると考えなければならない。定冠詞総称は談話による情報を前提としないからである。つまり

【定冠詞総称定義】

定冠詞総称は成員すべてにその指示物が『見えて (visible)』いなくてはならない

定冠詞総称が指し示す指示物は、共同体の話者すべてにその指示物が「見えて」いなくてはならない。指示物をその属性の束と考えれば、the television は、共同体話者すべてが共有知識としてもつ、「テレビ」に集まる属性の束——これを「既成概念」と呼ぶ——ことにならざるをえまい。すなわち the television はテレビという既成概念につけられた固有名に他ならないのである。

定冠詞総称が既成概念であるとするれば、逆に、既成概念化されていない名詞には the をつけることがむずかしい、という予測を立てることができよう。

- (27) a. The American husband never complain about his wife.
 b. The British gentleman is hard to find these days.
 c. *The pretty flower is a good present.
 d. *The tall boy is superstitious.

(27) において、the American husband, the British gentleman は、非常に典型的な属性を想像することが可能であろう。それにたいし、the pretty flower, the tall boy は、pretty flower, tall boy が既成概念化されていない、いわば無垢の名詞であるために、the をつけて総称化することができないのだ。また、the が形容詞と組み合わせられた用例の容認可能性も同様の手法で予測することができる。

- (28) a. The rich are not always happy.
 b. He spends all his spare time looking after the homeless.
 c. The young have their whole life ahead of them.
 d. *The pretty have many advantages.
 e. *Should the tall pay more taxes?

the weak, the strong, などを含め、その属性が容易に想像できる場合（に限って）定冠詞総称を作ることが可能であることがわかるだろう。

それでは Carlson (1980) の例に戻ろう。

- (29) a. The horse came to America with Columbus.
 b. *The horse arrived on my doorstep yesterday.

Carlsonはこの対比から、theには種族全体に重大なできごとが起こった（ここでは「初めてアメリカに持ち込まれた」）ことを意味する、と論じているが、この直観は定冠詞総称に既成概念（共有知識内にある属性の束）を結びつけることによって説明可能であろう。the horseが馬という種族のもつ既成概念であるとするれば、後続する述語は、その既成概念について説明する（あるいは揺るがせる）、種の本質に関わるものでなければならないからだ。(29b)のような偶発的な、既成概念に関わらない事態は整合しない。また、

- (30) a. The zoologists are trying to find blue-nosed ground squirrels.
 b. The zoologists are trying to find the blue-nosed ground squirrel.

(30b)の定冠詞総称に付随した、「滅多に見られない」「絶滅したと考えられてきた」などの語感も同じ起源のものである。動物学者が発見したとするれば、the blue-nosed ground squirrelという種族には新たなページ——「東京の下町で動物学者によって発見された」など種の新しい属性——を加えることになるからである。つまり「滅多に見られない」「絶滅したと考えられてきた」という既成概念が新たに書き換えられることになるのだ。さらに次のLawler (1973)による例をみてみよう。

- (31) a. Madrigals must be polyphonic.
 b. ??The madrigal must be polyphonic.

the madrigalは、それに結びついた既成概念であることを考え併せれば、(31b)の危うさはわかるだろう。既成概念というのはアプリアリに存在するものであり、その方向性を定める(must: ルート読み)ことなどではしないからである。

3.3 「暗示された (implied)」指示物と「確立された (pre-established)」指示物

定冠詞総称に付与される意味を吟味した後に問うべきは、1.1①に記した、存在読みの制限である。存在読みが制限される、という事実は何らかの形で、定冠詞総称のもつ意味によって説明されなければならないからである。そして定冠詞総称の既成概念は、その責任を果たすことができる。1.0の例を再掲しよう。

(32) a. Owls are in that cage.

b. *The owl is in that cage.

定冠詞総称が、英語話者が共通してもつフクロウの属性の束、すなわち既成概念を意味するとすれば、The owl に存在読みがあらわれないのは、自然な帰結である。それは、既成概念が実体をもった——普通の意味での——個体ではないからである。共有知識化された属性の集積である定冠詞総称の値を時間によって「付与」することが不可能だからである。

裸複数形が存在読みを生み出すメカニズムを思い出していただきたい。ここで取り扱ったすべての分析の底流に流れる直観「時が名詞句の解釈を決定する」、この直観は owls が変数として機能していることを意味する。[x is an owl] この変数 x に当てはまる個体が、あるできごとという限られた範囲の時点に限定され、そこに当てはまる具体的な個体の存在が「結果として暗示された」。だが、同じメカニズムは定冠詞総称には当てはまらない。定冠詞名詞句はその指示物を、述語によってあらわされる「時」に先んじて、決定されている。指示はすでに確立されているのだ。そして確立された指示物が、既成概念という実体をもたないものであるとすれば、どのような時の制限があろうとも、「そうした個体が存在する」という読みをもたらしめないのは自明なことであろう。定冠詞総称が実体をもたないという論点は、次の Lawler による 2 例を検証すれば事足りよう。

(33) a. Tigers attacked the village and chased the people away.

b. ?? The tiger attacked the village and chased the people away.

(34) a. Barb spent the day watching geese down by the pond.

b. *Barb spent the day watching the goose down by the pond.

また、Carlson (1980) では、次の例に関してある種の存在読みを認めているが、それは意味論的に重要な事実ではない。

(35) a. The horse came to America with Columbus.

「馬という種がコロンブスによって持ち込まれた」のであるならば、「現実問題としてコロンブスは数頭馬を持ち込んだのだらう」は、日常的な類推に属する事柄だ。事実この文は種に言及する総称読みが優先であり、また「コロンブスと共に持ち込まれた馬が数頭いた」という存在読み特有の解釈は（彼の言う通り）あり得ないからだ。また、裸複数に存在読み

を生起させる典型的な述語，進行相も総称名詞句の存在読みを保証しないことも付記しておく。

(36) *The horse is standing in front of the gate. (総称読み)

4. 結論

本稿では，裸複数に対する定冠詞総称の意味的特徴が，その実体をもたない「既成概念」への言及に起因すること。またその存在読みの欠如は，定冠詞名詞句がすでに確立された指示をもつことから自然に予測される事実であることを論じた。本稿で示した分析は未だ素描の段階であり，ここで提案した「既成概念」が従来の意味論の中で如何なる地位を与えられるべきかは，今後の研究課題としたい。

注

(*) ケンと，ケンの有する「足が速い」「背が高い」……などという属性との等価性は，Montague (1973) 以来広く踏襲されてきた。その正当性に関しては Dowty *et al.* (1981) を参照。

参考文献

- Carlson, G. (1979) "Comments on Infinitives," in *Papers Presented to Emmon Bach*, E. Engdahl and M. Stein (eds.) Amherst: G. L. S. A.
- _____. (1980) *Reference to Kinds in English*. New York: Garland.
- Clark, H. H. & Marshall, C. R. (1981) "Definite reference and Mutual Knowledge," in Joshi, Webber and Sag (eds.) *Elements of Discourse Understanding*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Dahl, O. (1975) "On Generics," in E. Keenan (ed.) *Formal Semantics of Natural Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Declerck, R. (1986) "The manifold Interpretations of Generic sentences," *Lingua* 68. 149-88.
- Dowty, D. R., Wall R. E., and P. Stanley (1981) *Introduction to Montague Semantics*, Dordrecht: Reidel.
- Farkas, D. & Y. Sugioka (1983) "Restrictive If/When Clauses," *Linguistics and Philosophy* 6, 225-258.
- Lawler, J. M. (1973) "Studies in English Generics," *University of Michigan Papers in Linguistics*, vol. 1.
- Lewis, D. (1975) "Adverbs of Quantification," in E. Keenan (ed.) *Formal Semantics of Natural Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Montague, R. 1973. "The Proper Treatment of Quantification in Ordinary English," in *Approaches to Natural Language*, Hintikka et al. (eds.) Dordrecht: Reidel.
- Onishi, H. (1990) "On Generic Noun Phrases," *東洋女子短期大学紀要* 22.
- Schubert, L. K. & F. J. Pelletier (1987) "Problems in the Representation of the Logical Form of Generics, Plurals, and Mass Nouns," in E. Lepore (ed.) *New Directions in Semantics*. 385-451. New York: Academic Press.